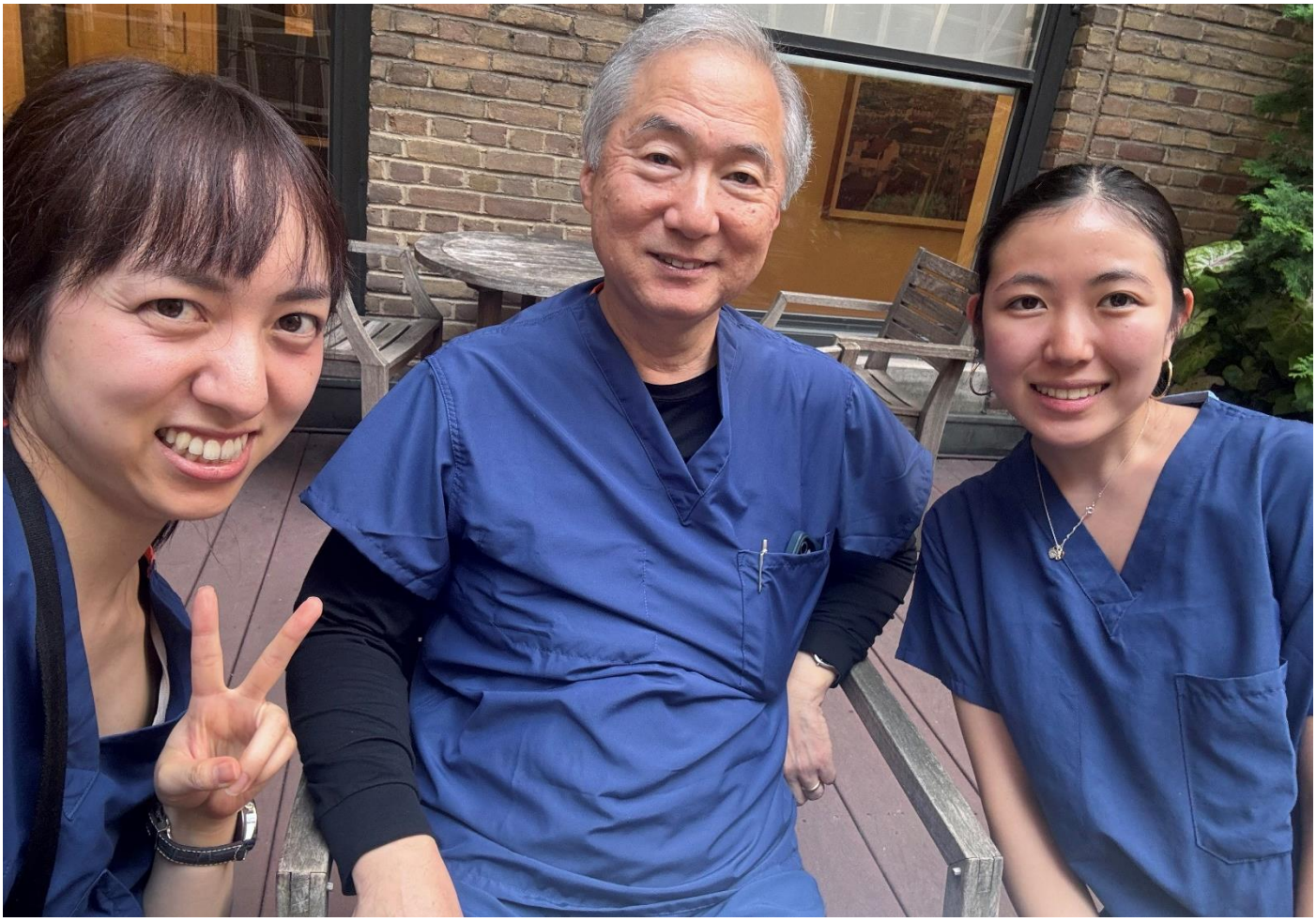
ニューヨークに行くのは初めてで、多種多様な文化と先進的な医療を学ぶことが出来るとの期待を胸に、出発しました。今までアジアやヨーロッパに旅行に行ったことはありましたが、系統だった研修旅行に参加するのは初めてでした。当日は台風で飛行機が出発できるかわからない状況の中何とか出発し、13 時間の飛行と 13 時間の時差ボケと荒いタクシー運転に耐えながら、マンハッタン入りを果たしました。8/19 から早速講習が始まりました。まず初めての地下鉄乗車です。日本の地下鉄駅より汚く、ホームレスが寝ており、気を引き締める必要がありました。Pace 大学という私立の綺麗な校舎で、医学英語の講義を受けました。Tony先生が、患者さんが訴える症状や問診の聞き方の英語表現を書いたプリントを配り、細かい発音や意味の違いを教えてくれました。LとRの発音の違いやTHの発音の難しさについて、学生時代に何度も教えられましたが、自分は正しい発音をしているつもりでも、ネイティブの人には正しく聞こえないということが多々あり、かなり意識をして口を大きく動かさないと正確な発音にならないのだと実感しました。午後にブロードウェイ女優の由水南先生の講義を受けました。軽快な音楽を聴いて、身体の力を抜くストレッチをしたり、ジェスチャーゲームをしたり、生きやすくなるための考え方を伝授してもらいました。毎日チェックインし、自分の本当の気持ちは何なのかを知り、今日は頑張れる日なのか、少し休む日なのか判断することが大切だと学びました。長いスパンで人生を生きる上で心がけたい考え方だなと感じました。Pace大学での英語講座は 3 日間ありましたが、昼食は昼休みに外にベーグルサンドやピザを買いに行ったり、大学に行く前にホテルのカフェでペストリーやブリトーを仕入れたり、日本から持ってきたカップ麺をすすったりしている参加者もいて、多種多様で面白かったです。8/21・22 は Phelps 病院で ACLS の講習を受けました。病院に行くまでの道のりと出発時間が 6 時半と早く、移動だけでもかなり疲労がたまりました。ニューヨーク中心部のグランドセントラル駅まで地下鉄で 20 分弱、グランドセントラル駅から病院最寄り駅まで特急で 50 分、駅から病院まで送迎車で 15 分かかりました。Phelps病院の職員は皆さんフレンドリーで、ACLSの講義もコーヒーを飲みながら聴き、昼食もケータリングのブリトーやピザ、サラダ、ケーキを提供してくださいました。BLS を日本で習得した時は堅苦しい雰囲気で参加者全員が緊張していましたが、Phelps 大学での ACLS はとても和やかで、過度に肩身の狭い思いをせずに、勉強だけに意識を集中させることができました。8/23～8/25は Pace 大学に戻り、俳優に患者役をして頂きながら医療面接の練習をしました。3 日間は分刻みでスケジュールが定められていました。研修医と医学 5 年生でペアが決められ、1 日 4 症例ずつ交代で医療面接を行いました。1・2 日は医療面接のみ、3 日目は身体診察も含まれていました。模擬患者さんはネイティブなので、単語は研修の最初の方に勉強したものでも聞き取ることが難しく、2 日目にやっと慣れました。しかし慣れた 3 日目に 2 日間での医療面接を軽くプレゼンしてから続けて身体診察をしなければならず、これから何の診察をするのか、値はどうか、その値は異常値かどうかを言い、こまめに手指や聴診器の消毒を行い、疾患を推測して伝えることを英語で行っていたので、勉強になりましたが、なかなか厳しかったです。面接ごとに患者役の俳優の方からフィードバックを受けられるのが良かったです。俳優の方には日本人女性がいらっしゃり、紙を使ってレクチャーしてくださいました。3 日間のトレーニング最終日には卒業セレモニーのような会があり、俳優の方々一人ひとりが応援メッセージをくださり嬉しかったです。8/26～8/28 はニューヨークのクリニックへ見学にいく研修でした。私は 8/26・8/27 の 2 日間ニューヨークで開業している消化器内科の岩原先生のクリニックへ見学に伺いました。奥様が金沢出身の方で、石川県を懐かしんでいました。医療面接、診察を拝見しました。診察前にまず加入している保険を確認し、患者さんの保険でカバーできる検査、治療を保険会社に聞きます。日本のクリニックで当たり前に行っている胸部レントゲンや内視鏡治療は採算が取れないため廃止され、内視鏡は週に 2 回マンハッタンの内視鏡センターで開業医が集まって自分の患者さんの検査をしていました。企業に勤めている人を除き、学校健診や人間ドッグといった健康診断をする機会がほぼなく、内視鏡は基本 3 年に 1 回、腫瘍マーカーは基本とらないとお聞きし、衝撃を受けました。病院によって違うかもしれませんが、患者さんは完全予約制で 16 時には診療が終わり、院内での投薬はしないため、医師や医療スタッフが休日にしっかり身体を休めることができるのは良いと思いました。患者さんは現地出身の方も駐在日本人もいました。岩原先生は 8 歳からニューヨークに住み、学校

も医師免許取得もずっとニューヨークですが、とても穏やかで日本語も英語も流暢にお話されるため、仕事で海外に来ている日本人からすると安心できる病院なのだと感じました。8/27 にはマンハッタン内視鏡センターに行きました。ビルのワンフロアすべてが内視鏡センターでした。消化器内科医 4，5 名、麻酔科医 4，5 名、看護師数名、アシスタント数名が働いていました。日本と大きく異なるのは、プロポフォールを使った全身麻酔で施行していたことです。プロポフォールのかかりやすく覚めやすいという特徴を生かした検査で、苦痛を与えず、かつ麻酔科医がバイタルを確認しているので安全性も担保される点で、患者さんの満足度が非常に高く感じました。検査後はジュースやお菓子も渡していました。昼食は持参したものを岩原先生とワシントン大学インターン生のミアさんと、センターのベランダで食べました。ニューヨークは湿度が高くなく、外でランチをするのが楽しく感じられました。3 日目は Andrei Rebarber 先生の経営する妊婦健診センターに行きました。日本と異なり最初にエコー技師が妊婦のエコーをし、エコー技師が産婦人科医に結果を説明し、最終的な検査結果を産婦人科医が妊婦に伝えていました。2 人の産婦人科医と 5，6 人のエコー技師、連絡取次専門の事務員、受付係と職種が分かれていました。院内はとても綺麗で待合室にはコーヒーメーカー、ジュース、お菓子が置かれ、完全予約制であり、待ち時間の短縮もスタッフの労働時間の時短もはかられていました。またエコーをする人と診断する人とで分かれているので、分業出来て良いと思っていたのですが、妊婦さんの中には予約外にきて、エコー技師ではなく産婦人科医に診てもらいに来院したと言い張る方がいらっしゃり、事務員が紹介元の病院に問い合わせたり、受付の人が説得したりするハプニングがありました。どの国でもいろんな患者さんがいらっしゃるのだとわかりました。8/29 は Mt.Sinai 大学の医学生に校内ツアーをしてもらいました。講義室、解剖教室、身体診察や医療面接の練習室の他にも、寮や 24 時間使えるジムやヨガ室も案内してもらいました。驚いたのが休憩スペースに経口の麻薬性鎮痛薬や妊娠検査薬が無料で買える自販機があったことです。薬があまりにも気軽に手に入るので、中毒になるリスクと常に隣り合わせなのだとわかりました。その後森下先生という研究者にお会いし、お話を聞いたり研究室の見学をしたりしました。森下先生は臨界期が終了すると発現が上昇し可塑性を制限する分子ブレーキを発見された方です。精神科病院で研修されたということですが、臨床で疑問に感じたことを研究の道に進んで解き明かされたとお聞きしました。川竹さんという京都大学医学科を卒業し、研修医を終えてからニューヨークの森下先生の研究室に入られた研究員にもお会いしました。ニューヨークでは研究医・研究員の待遇が良く、もし結果を残せず大学の研究室を出ることになっても製薬会社や食品会社など働き口が沢山あるとお聞きしました。しかし研究室長の場合は、結果を出せなければ秘書室の職員になる、給料を所長含めて研究費から出す必要があるため、科学的な根拠なしで研究計画を 4，5 年にしなければならないとのことでした。研究室はお洒落なオフィスのようで、1 つの分野で何人も教授がおり、和気藹々としており、雰囲気はとても良かったです。台風で飛行機は飛ぶのかどうか心配していましたが無事帰国しましたが、羽田小松便が雷で大幅遅延するというハプニングはありました。朝早くから夜遅くまで忙しい日々でしたが、2 週間が 1 か月と思えるような充実した研修でした。

初期研修医 2 年目　下﨑　琳

Thank you Minami-Sensei